

特集

ゼネコン勤務の一級建築士 ～活躍のフィールドとその魅力～

建築現場にはゼロから作る楽しさと、 絶対に思い通りに行かない面白さがあります。



戸田建設株式会社
本社建築工事統轄部 建築工務部主任
一級建築士

い け は た ひ ろ ゆ き
池端 裕之 氏

建築物の設計や工事監理業務を行うには、小規模な建物以外、すべて建築士の免許が必要だ。となると大型建築物を設計・施工する総合建設業、いわゆるゼネコンには建設に関する高い技術力とノウハウを持った建築士が大勢いるはずだ。一級建築士はゼネコンの中でどのような活躍をしているのか。一級建築士にとってゼネコンの魅力とは何か。その活躍の場とやりがいについて、戸田建設の一級建築士・池端裕之氏に語っていただいた。

Profile

池端 裕之（いけはた ひろゆき）氏

1973年生まれ、千葉県出身。1998年、東京工業大学大学院理工学研究科建築学専攻修了。同年、戸田建設株式会社入社、大阪支店建築工事に配属。大阪では豊中駅前西口再開発工事などを担当。2002年、1級建築施工管理技士試験合格。2003年、一級建築士合格。東京支店建築工事を経て2005年より現在の部署に着任。2007年、1級土木施工管理技士試験合格。

病院や学校に強い「建築の名門」

——最初に戸田建設についてご紹介します。

池端 戸田建設は、全体の事業のうち8割程度を建築事業が占める建築主体のゼネコンであり、歴史的建造物など戦前から数多くの実績を持っていることから、建築の名門として知られています。特に教育施設や医療・福祉施設の実績が多く、「学校・病院の戸田」とも呼ばれています。病院についてですが、近年ではただ単に建物を建設するだけではなく、事業企画の段階から病院経営全般についてのコンサルタントの役目も果たし、全体最適な建物を提案する、ということも行っています。

また、当社は医療機器販売の免許も持っていますので、医療機器についても当社が手掛けることによって、事前の建築工事の段階から導入する医療機器を見据えた補強工事等を行うことによって、無駄な時間とコストを無くすことが出来るというメリットもあります。

このように創業時から学校や病院等に強いゼネコンとして名を馳せ、各病院、各学校の諸事情や機能に精通しているからこそ、公共機関だけでなく民間の学校や病院も含めて、当社にずっと発注し続ける「戸田ファン」が多いと言えるでしょう。

また、平均勤続年数21.9年（2008年3月時点）という全産業中10位、業界2位の実績で、「働きやすい企業」としても評価されています。

——戸田建設の採用方針の特徴を教えてください。

池端 営業や開発など、部門ごとに細かく採用人数枠を定めて募集している企業も多いのですが、当社の場合は原則として、まずは大卒で建築施工職を採用するという方針です。就職活動をしている学生の段階では、ゼネコン社内にどのような職種が存在するのか、自分がどのような職種に向いているのか、理解しきれていない面も多い事を配慮しているためです。そこで、まずは建築施工職として入社し、建物の造り方の基礎をきちんと学び、それと同時に、社内にはどのような部署や職種があるのかを理解してもらった上で、建築施工職として現場の作業所長を目指すのか、それとも営業や積算、購買等の他部署を希望す

るのか、本人と面談をしながら将来の進路を決めていく、という方針を取っています。そのためにも、新入社員教育をはじめとする社内教育については、他社と比べても非常に充実していると自負しております。

——今年は何名の新入社員を採用されましたか。

池端 今年は建築技術系で約80名を採用しました。大学院建築学専攻や大学の建築学科、高専を卒業して一級建築士受験の学歴要件を持つ方を中心に、毎年ほぼ同じ人数を採用しています。

ダイナミックなゼネコンに憧れて

——池端さんはなぜ戸田建設に入ろうと思ったのですか。

池端 高校時代の私は、実は文系人間でした。ところがある時、力の作用やそのダイナミズムを学ぶ物理に深く興味を持つようになったのです。

このダイナミックな力学を実現できるのはどこか。そう考えた時に浮かんできたのが、建築業でした。そこで建築の研究ができる理系の大学を目指し、東京工業大学工学部建築学科に入学したのが、建築を学ぶ事になった経緯です。

大学の建築学科では、近代日本の都市計画を研究していたのですが、ある日、研究室の書庫で、伊藤忠太という明治・大正期の建築家が設計した「震災祈念堂」という建物の図面を見る機会がありました。非常に繊細で美しい図面だったのですが、それを実際に建てたのが現・戸田建設であると知り、ゼネコンに興味を持つようになりました。

数あるゼネコンの中でも、最終的に戸田建設への入社を決心したのは、社員数約5,000人という規模の会社でありながらも、社員に仕事をどんどん任せてくれる企業風土がある、と先輩に聞いたからです。また、会社の家庭的な雰囲気も気に入りました。

——池端さんご自身の入社後のキャリアをお聞かせください。入社後の経験で、やりがいを感じられたのはどのような事でしたか。

池端 入社後、大阪支店建築工事部の配属になり、まず阪急宝塚線豊中駅前の再開発の現場を担当しました。そ



の後、東京支店に転勤してからも含めて7～8年の間、計6つの建築現場を経験しました。実際に現場監督を経験することで次第に理解していったのですが、建築現場の施工管理という仕事は、ただ単に作業員の監督をするのではなく、作業所のコスト、工程、品質、安全などのマネジメントをするという業務であり、例えるならば、中小企業の経営者のような感覚ですらあるのです。また、事前に与えられているのは建物の最終型である設計図であり、その建物をどのように造るのかについては、現場の判断に任せられます。いわゆる組立図のようなものは、自分たちで考えるわけです。どうすれば安全・高品質で、かつ工期を守り、コストを抑えて、美しく建物を造り込んでいくことが出来るのか？ 色々なアイデアを頭に浮かべながら、計画図を書いたり仮設計算をしたり、原価管理をしたりすることこそが、施工管理という仕事の最も面白い部分だと思います。

——では、入社後、東京在住の池端さんはまず大阪への赴任となったのですね。

池端 そうなんです。学生時代は東京都市近郊の都市計画を研究していました。明治から昭和のはじめにかけて、もともとは畑だったあぜ道から郊外の街並みが形成されていく街づくりのダイナミズムに胸を打たれたと面接で話したので、間違いなく東京だと思っていたら、「では、君は大阪勤務」と言われました(笑)。

戸田建設では、当時で5年、現在は4年に一度の割合で一斉に転勤があります。東京でモノが造れても大阪では造れない、日本では作れても海外では作れない、ではゼネコンの現場監督は務まらないからです。全国各地の

様々な地域で、かつ自分がまったく関わりのない土地に行って、一からやって一人前になって帰ってくるというのが会社の教育方針としてありますね。

現場の進捗管理を受験に応用

——一級建築士を取得されたのは、いつ頃ですか。

池端 大阪支店から東京支店に転勤した後です。「建築をやる人間は必ず一級建築士を取る」という意識は入社してから持っていましたが、自分自身、大学入学まで考えた事のなかった資格なので、入社後もしばらくは「施工の人間なのだから急がなくてもいいだろう」という気持ちがありました。ただ、「建築のプロ」といったら一級建築士ですし、私たちゼネコンの人間はお客様をはじめ、たくさんの対外的な方達と接する事が多いので、一級建築士はいずれ取らなくてはいけないな、とは考えていました。

こうした状況から取得に向けて弾みがついたのは、大阪支店での最後の現場に配属になった時でした。兵庫県の山中の現場に約1年間配属されていたのですが、その現場の作業所長にある日、「自分は二級建築士しか持っていない。自分が一級建築士を持っていないことでどれだけ苦労しているか理解できるか？ とにかく若いうちに一級建築士を取得しなさい」と厳しい口調で忠告を受けたのです。その時の所長の真剣な眼差しに目が覚めたような気持ちとなり、その年に学科試験に臨もうと決めました。

——働きながら、どのような勉強方法で合格されたのでしょうか。具体的に教えていただけますか。

池端 本気で取り組む前は過去問を眺める程度でしたが、上司にガツンと言われてからは「このような勉強方法ではダメだ」と思い直して、過去問はまずは一切見ないようにしました。過去問を覚える、暗記するといったやり方では受からない試験だなと感じたからです。

逆に言えば、教科書を完全に理解してしまうと、過去問は自分が教科書を理解しているかを確認するツールでしかありません。ですから過去問のパターンを覚えるような間違った方向には絶対行ってはいけない試験なのです。そこで、まずは資格学校の教科書に書いてある内容を完全

に理解するように努力し、それでも理解できない部分は大学の教科書などを引っ張り出したりもしました。

——一級建築士の受験勉強をどのようにして攻略されたのでしょうか。

池端 現場では突発的な業務も起こります。そこで、勉強する時間は、仕事の終わる時間次第にして、一日に何時間やるかは決めていませんでした。ただし、自分の中で試験日から逆算して総時間を算出する方法を取ろうと決めました。

私が感じたのは、資格試験は建築施工現場の進捗管理と同じだという事です。建築現場では、まず竣工時期が決まったら、事前に検査期間があり、そこから仕上げはいつまでにしなければならない等逆算することで、竣工までをスケジュールリングしていきます。工事の現場で自分がやっている事を、自分の勉強に活かせばいいわけです。資格試験では、試験1カ月前からは確認テスト期間になりますから、6月までにすべてのテキストを終わらせるには、1日に何ページ理解しなければならないかは逆算すれば自然にわかります。このデッドエンドを自分の中で算出して、リミットまでに確実に実行していきました。

この方法で、仕事をしながら学科試験にストレート合格し、その後、東京に異動になってから設計製図試験にも無事合格する事が出来ました。

——池端さんが一級建築士を取得されたのは、入社何年目にあたりますか。受験をする時期としては良かったと思われますか。

池端 合格は入社5年目です。やはり、資格を取る時は、本人に「絶対に取ってやろう!」という気概がないと難しいですね。「今しか取れない。この場で取らないと後で絶対に後悔する」と、自分を追い込んだ状況になって初めて真剣に取り組めるものだと思います。私の場合、それまで「周りが模擬試験を受けに行くから自分も行こうかな」程度で真剣味がないまま5年も経ってしまいましたが、本腰を入れて受験に取り組むには少し遅すぎたと思っています。

今でも反省しているのですが、私のように入社直後の時期を逃してしまうと、年々責任ある業務を任される量が増えていくので、受験勉強に割く時間がなかなか取れなくなりそうです。ですから、今の新入社員にはなるべく早く、出来るなら新

入社員の時から勉強を始めるように奨めることにしています。

現場の地震速報システムを開発

——池端さんご自身はその後、どこに配属されましたか。

池端 一級建築士に合格して2年後、現在自分がいる本社建築工事統轄部建築工務部に異動になりました。私が担当している業務は、簡単に言うと、全国の作業所に勤務する建築社員が更に仕事をしやすくなるような仕組みを作る、ということです。「自分が今度現場に戻ったらラクになっているにはどうするか」をイメージすることが基本ですね。そのために、建築施工社員の全国の配置を検討したり、業務の助けとなるようなシステムを開発・導入したり、資格取得のサポートも担当しています。

——今は現場の仕事から離れているという事ですか。

池端 離れているというより、工事統轄部は全国の現場を俯瞰する立場になります。私の仕事は人材関係がメインですが、部署としては全国の現場の原価管理や集計から現場の人員配置まで、何でも担う形です。

——建築工事統轄部に配属されてからのトピック的な業務をご紹介しますか。

池端 2006年に現場地震速報『ユレキテル』の開発に携わりました。戸田建設は本当に何でもやる会社です。『ユレキテル』も、気象庁が試験的に地震速報を流しているのを見て、「ゼネコンとして、何か出来ないか」という事から開発が始まりました。不安定な建築現場の足場や脚立作業をする現場社員と作業員を守るためにはどうすればいいのか。まず現場で速報が出なければいけないと考えたのです。

ゼネコンは建築物を造る時に地盤調査を必ず行っているんで、どのような地盤か分かります。気象庁から入ってくる情報にこの地盤係数をかけ、実際工事中の建物の揺れがどの程度かを予測し、「あと何十秒で震度〇の地震がきます」とリアルタイムで配信するシステムが『ユレキテル』です。これは当社の開発の目玉となり、メディアで大きく採り上げられました。建築中だけでなく建物完成後もそのまま置いて欲しいという要望が、今も多く寄せられています。例え

ば工場のラインを震度4で止めなければいけない所もあれば、精密機械のように震度2で止めなければいけないラインもありますね。そうした時に『ユレキテル』できちんと解析すれば、適正な値でラインを止める事が可能になります。

いずれにせよ根底にあるのは、現場社員と作業員に仕事のしやすい環境を提供するという工事統轄部の任務という事です。

建築系社員2,700人中、 1,200人が一級建築士

——戸田建設の資格に対する方針をお聞かせください。

池端 当社は資格取得には、本当に力を入れています。そして建築系社員には、一級建築士を必ず取得させる、という方針を掲げています。

世間一般から見れば、建築のプロの資格と言えば一級建築士なのではないでしょうか。医者が医師免許、美容師が美容師免許を持っているように、私たち建築系社員なら必ず取得すべき資格だと思います。当社では、新入社員研修の段階から一級建築士資格のガイダンスを実施し、社員への意識付けをしています。

また、一級建築士の受験対象者については、出来るだけ資格学校に通学できるような環境の現場に配属し、試験1ヶ月前からは、試験勉強の最終追い込みに集中できるような環境を作るよう全国に指示を出しています。会社としてもバックアップに労を惜しむつもりはありません。



私自身が資格取得のサポートをしながら感じることは、やはり新入社員から入社5年目までの時期が、最も一級建築士資格が取得できる環境が整っている、ということです。まだ若いこの時期は、業務の責任もそれほど重

くない上に、自分自身で時間を作ることが出来ます。家庭を持ってからでは土日の資格学校への通学勉強は、自分も家族も辛くなってしまいます。私自身の経験と反省を踏まえても、若手社員には早めに取得するように言っています。

——建築部門には何名の一級建築士がいますか。

池端 建築部門には約2,700人の社員がいますが、その中の約1,200人が一級建築士を取得しています。当社では様々な部門で一級建築士が活躍しています。

——社内的に一級建築士受験のフォロー制度はありますか。

池端 新入社員を含めた全ての受験対象者に、まずは毎年11月に一級建築士資格取得に対する意識付けのセミナーを開催しています。受験対象者は学校に通いやすい現場に配属されますから、その後は各人が資格学校に通うことで勉強をスタートさせます。1月から6月までの時期は、毎月1回は全国で模擬テストを開催し、学科試験の直前には受験対象者を集めた2泊3日の合宿を実施します。更には7月と8月に製図講習会を開き、9月末には3泊4日の製図合宿を開催して、10月の設計製図試験に臨んでいます。

——徹底した支援体制ですが、学費の補助はありますか。

池端 学費自体の補助は実施はしていません。ただし合格時には、合格祝い金として建築部門から30万円、人事部門からは3万円プラス登録料等の諸経費相当額を支給しています。

——戸田建設では、どのように一級建築士試験を受験する意識付けをされていますか。

池端 資格は仕事のためということもあるのですが、何よりも自分自身のためになる、ということを理解してもらっています。一級建築士を取得することで、自分自身の仕事に対するスタンスがこう変化していく、ときちんと理解させてあげたいと考えています。

一級建築士資格は足の裏の米粒とも言われます。施工管理の業務に就いている限り、一級建築施工管理技士資格だけで十分、という声も聞かれます。しかし、建築という学問について、きちんともう一度体系的に整理し直す作

業を、自分自身で計画的に遂行していくというのは、非常に大事です。計画、環境・設備、法規、構造、施工、設計製図というように、建築学を再度全体的に俯瞰することは、普段の業務でも大きな自信に繋がるのではないのでしょうか。

——一級建築士以外の資格も推奨されていますか。

池端 建築系社員については、一級建築士の他に、1級建築施工管理技士と1級土木施工管理技士試験のための社内講習会を、毎月開催しています。また、事務系社員には定期的に宅建主任者の講習会を開いています。社員のモチベーションを上げられるよう、資格取得のフォローについては定期的に実施していく体制作りを心掛けています。

ゼロから造り上げるゼネコンの醍醐味

——ゼネコンの魅力を、一級建築士を目指している方と目指そうとしている方にアピールしてください。

池端 繰返しになるかもしれませんが、ゼネコンの仕事は、設計図に見える仕事をやっているわけではありません。その図面を現実のものとするには、様々な困難や悩みもありますが、そこで技術屋としての力量が試されるとも言えます。この世の中に全く同じ建物は無いわけです。それぞれの建物が建つ環境も違えば、造り込む人間も異なります。また、設計図だけで建物が出来るわけでは有りません。それぞれの納まりを検討し、作業員が理解できる図面に書き換える必要もあります。

その中で、いかに不具合の無い建物を実現するか。いかに安全に作業員に仕事をしてもらうか。いかにロスコストを生まずに工期内で竣工させるか。自宅で風呂に浸かっている時でも、色々なアイデアが思い浮かんでくるわけです。

現場にはゼロから造る楽しさがあるとよく言われますが、やはり毎日悩み、考えるところが楽しいのだと思います。すべてが自分の思う通りには絶対にいきません。それでも、施工計画を自分で決めてアクションを起こし、協力会社の方々と議論を進めながら、最後は全てのリスクを背負って、自信と責任を持ってやっていく。そして努力したことが建物という形になって、目に見える形で毎日少しずつ出来上がっていくわけです。



また、その過程の中では、多くの人との出会いや触れ合いもあります。時にはその建物に実際に住まわれる方から、「本当に有難うございます」と、涙ながらの感謝の言葉をいただくことがあります。そのような時、苦勞した甲斐があったな、と心底から思います。

最近も弊社が建て替えを施工した、古文書等の研究をする建物の責任者のお話を聞く機会がありました。建て替える以前は研究者の方々が部屋に籠り、自分達の研究をする建物だったのですが、今回の建て替えによって非常に明るく開放的な建物に生まれ変わりました。その責任者が言われるには、「今までの様に、ただ研究をするだけではなく、その研究成果をもっと積極的に発信しなければいけないということ、この建物に気付かされました。おかげで、とても仕事のやり方が変わりました」とのことでした。建築物というのは本当にそのような力を持っているものですし、その建築物を造り上げるゼネコンの仕事は、色々な要素と醍醐味が詰まった、他ではなかなか経験できない面白い仕事だと思います。

——最後に、受験生にメッセージをお願いします。

池端 資格を取るのには、周囲に求められるからでも、会社で言われるからでもありません。最後は自分のためです。自分で必要だと認識した時に初めて取れるものでもあります。一級建築士は努力すれば必ず結果に結びつく試験です。受験勉強に時間がかかる試験かもしれませんが、TACの講義にきちんと出席して、宿題もすべて提出していれば、絶対に受かります。頑張って頂きたいと思います。そしてこの特集を読んで、少しでも「ゼネコンって、面白そうだな」と興味を持たれた方は、ゼネコンの門を、戸田建設の門を叩いてください。お待ちしております。